



第 126 回

鶴見大学図書館貴重書展示

『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798) の登場と革命の時代

イギリス近代詩の幕開けとなった、ウィリアム・ワーズワースと S.T. コールリッジによる詩集『抒情民謡集』の登場と産業革命・フランス革命の背景を、同時代の資料を通して探って行きます。

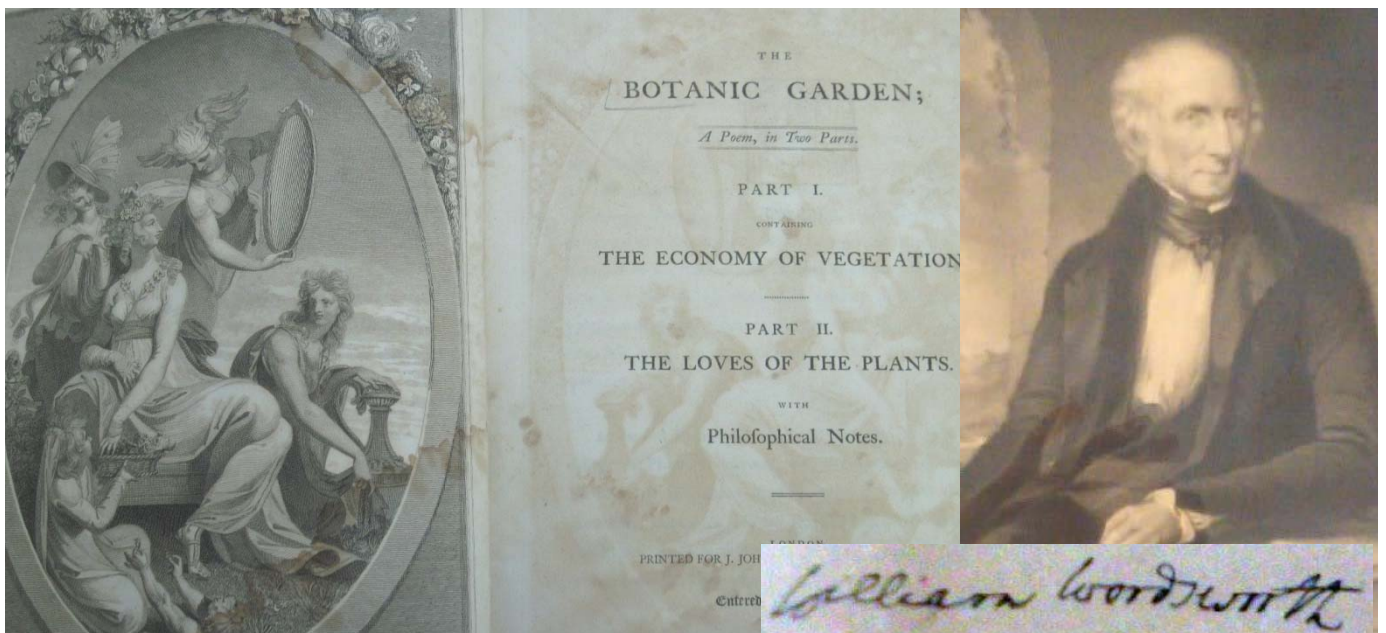
展示資料：

ワーズワース／コールリッジ『抒情民謡集』初版（1798）／ 『ブリタニカ百科事典』（1771）
 ウィリアム・ギルピン『ピクチャレスク旅行記』（1786）／ エラズマス・ダーウィン『自然の殿堂』（1803）
 ロバート・ブレア／挿絵ウィリアム・ブレイク『墓場』（1808） ほか

平成 22 年 10 月 19 日(火)～11 月 6 日(土)

鶴見大学図書館 1 階エントランスホール (入場無料)

開館時間は 8:50～20:00 (土曜日は 18 時まで) 休日は閉館
 但し、紫雲祭期間中の 10 月 31 日(日)は展示のみ行います(9:00～17:30)



展示リスト

1. ウィリアム・ワーズワース署名入り版画 [原画 Benjamin Robert Haydon]
2. ウィリアム・ワーズワース署名入り版画 [原画 Margaret Gillies]
3. 『抒情民謡集』初版 1798
4. ウィリアム・ワーズワース 『抒情民謡集』 2巻 1800
5. ウィリアム・ワーズワース 『抒情民謡集、牧歌的その他の詩』 1802
6. ウィリアム・ワーズワース 『二巻組詩集』 1807
7. 『ブリタニカ百科事典』 初版 1771 (リプリント 1968)
8. エラズマス・ダーウィン 『植物園—二部からなる詩』 1791
9. エラズマス・ダーウィン 『自然の殿堂ないし社会の起源—詩と哲学的注釈』 1803
10. トマス・アッスル 『書記法の起源と進歩』 1784
11. ウィリアム・ホガース 『教訓としてのホガース—ホガース全作品 約 80 枚の銅版画を含む』 1768
12. アン・ラドクリフ 『ユドルフォの謎、ロマンス—いくつかの詩編を交えて』 4巻 1794
13. R. ベントリー 『ベントリーのトマス・グレー6 詩選への挿絵』 1753
14. ジョセフ・リットスン編 『イギリス歌謡選集』 (挿絵ウィリアム・ブレイク他) 1783
15. ジョン・ゲイ 『寓話と著者の生涯』 (挿絵ウィリアム・ブレイク他) 1793
16. ロバート・ブレア 『墓場—1 編の詩』 (ブレイク原画の 12 葉の挿絵) 1808
17. 『イギリス本島全国旅行記—各地方別、有益なる所見を交えて』 4巻 増補第 6 版 1761
18. ウィリアム・ギルピン 『主として絵画的景観に関連した 1772 年の観察記録』 2巻 1786
19. ウィリアム・ギルピン 『絵画的景観について、絵画的景観の旅、および風景画についての 3 評論』 第 2 版 1794
20. ユヴデイル・プライス 『絵画的景観試論—崇高と美との比較において』 1794
21. 『絵画的景観を探るイギリス湖水地方の旅—フィールディングとウォルトン画の 48 葉のカラー図版入り』 1821
22. ジョセフ・ウィルキンソン画 『カンバーランド、ウェストモアランド、ランカシャーの 特選景観』 1810
23. ウィリアム・ワーズワース 『ソネット集ダッドン川、ヴォードラクールとジュリア、他詩編』 1820
24. ウィリアム・ワーズワース 『イングランド北部、湖水地方案内』 1835
25. 『湖水地方の完全版案内—旅行者のための詳細な案内』 1842

『抒情民謡集』(Lyrical Ballads, 1798)の登場と革命の時代

今回の貴重書展示は、鶴見大学図書館所蔵図書のうち、1798年に S.T.コールリッジとウィリアム・ワーズワースという二人の青年が匿名で出版した一冊の本『抒情民謡集』(Lyrical Ballads)を中心にすえることにした。図らずも、この小さな本が、現代詩とそれ以前の詩との分水嶺をつくるという、文学史上画期的な役割をこなうことになる。一体どのような文化的背景がこの詩集の出現を可能としたのだろうか。本図書館所蔵資料の中から、18 世紀よりフランス革命を経て 19 世紀に至るイギリス文化史上の背景を探ってみたい。第一に、18 世紀の科学・文化の発展、次に 18 世紀末の怪奇小説ブーム、第三に、バラッド、詩歌の人気、さらに絵画的景観美への関心である。最後に、現代の環境保護の精神に通じる、ワーズワースの湖水地方の景観保護への情熱についてもふれたい。

ワーズワースの詩の革新性

資料について紹介する前に、『抒情民謡集』の革新性について説明する必要がある。どの国の文学史においても、一つの作品の登場が新たな時代の幕開けとなるという例は決して多くない。イギリス文学においては、もう一つ比較すべき事例を挙げるとすれば、1922 年のジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』の出版であろう。登場人物の心理内部から客観的な論理を無視した描写をおこなうという手法は、多くの人々に衝撃をもって受けとめられた。しかし『抒情民謡集』は、ワーズワースとコールリッジが当時多くの人になじみの深かったバラッド形式やシンプルな詩歌の形式により、一般の読者のために書いた詩を集めたもので、直接に大きな社会的反響を呼ぶものではなかった。

『抒情民謡集』が革命的なのはその形式でも、思想でもない。それ以前の時代の文学と決定的な差があるのは、詩または世界の事物を見つめる詩人の態度である。たとえば「早春に書いた詩」という小詩がある。そこに描かれているのは、早春の森の木々の芽生えと鳥のさえずりの心地よい情景である。しかし詩人は突然、全体で喜びを表わす自然の生き物に対して、自ら不幸を生み出している人間の存在に対する悲しみの念を覚える。自分の見つめる対象についての客観的な特徴から、読者と共通の考えを導き出すのではなく、自分の見つめる対象について、自らの想像力により、まったく新たな観念に至るのである。読者は詩人と同じ想像力を持って、詩人の観念に近づかなければならない。「白痴の少年」も同様である。読者はただこの詩で語られる話をたどり、主人公の少年のちぐはぐな行動を知るだけで、客観的には何の感動も得られない。しかし、想像力を解放してこの詩の語る物語を読むとき、読者は、それまで知的障害者に対して自分がいっていた見方が変わってしまったことに気づくのである。

前近代においては、宗教的伝統が、世界の事象にかかわる真実について、客観的事実に基づいて、だれでもがその真実を共有できることが当然であると考えられていた。しかし近代においては、一人の見た真実は、決して一般的な真実とはならない。観る人の数だけの真実があるというのが、現代人にとっての事実である。ジョイスの『ユリシーズ』は、まさにこの認識を前提としていたのである。『抒情民謡集』は、こうした現代文学の常識を先取りしていたといえるであろう。

ワーズワースが2巻本の『抒情民謡集』、そして1807年の『二巻組詩集』を出したとき、その根本的な意味での詩を作る方法の斬新さに気のついた読者は多くなかった。しかしワーズワース初期の詩の特徴として、「蛭取り人」、「白痴の少年」、「狂気の母」、「年老いた乞食」や子どもたちなど、社会の周辺的な人々に目を留める傾向がある。これは、普遍的な人間存在の尊厳に注目するためには、極端な状況にある人間に題材を求める必要があるためであろう。しかし、こうした社会的弱者に目を留めるワーズワースの姿勢が、ワーズワースの「急進派」詩人としての評判を決定付けることとなり、酷評を受ける。フランス革命後の当時の反革命、保守反動の政治的風潮の中にあっては、些細なことが政治的判断の材料になってしまったのである。ワーズワースが正統な評価を受けるためには、フランス革命後の激しいイデオロギー対立の時代を過ぎて、19世紀半ば近くまで待たねばならなかった。

展示資料について

ワーズワース自身、旺盛な科学についての関心を持っていたが、18世紀の科学、学術の発展の背景が文学において決定的に重要な影響を及ぼしていたことは疑いない。1771年に出版された『ブリタニカ百科事典』の初版にみられる、医学や工業技術の項目についての詳細な図解をみると、これが一般読者の好奇心のためではなく、科学技術の応用に寄与するという意義が大きかったことがわかる。そして今回の展示で注目していただきたい資料の中に、ワーズワースと同時代の科学者エラズマス・ダーウィンによる2点の著作がある。以下の解題にあるように、エラズマスは、後に進化論において大きな社会的な反響を巻き起こすチャールズ・ダーウィンの祖父に当たる。詩人として当時有名であっただけでなく、医師として科学者として時代の先端的な知識を有していた。特に『自然の殿堂』には、原始の地球において、混沌とした環境の中で原始的生物が発生し、次第に複雑多様な生物に発達してゆくという進化論的な生命観がすでに見られる。ワーズワースを含めて、フランス革命後の知識人たちの間では、聖書の創世記中の神による天地創造は、もはや「文学的な喩」にすぎず、ここにダーウィンが提示する神によらない生命の出現という考え方はすでに広まっていたのである。『抒情民謡集』を現代詩の幕開けととらえるべき、科学文化的背景の一つである。

トマス・アッスル『書記法の起源と進歩』においては、当時の言語学的関心、言語と文字の起源についての関心に注目したい。人間の思想は言語という道具によって記される。その表現と意味の仕組みを科学的に考えようとする態度は、聖書をロゴスとして神聖なものとする伝統神学の態度とは一線を画す。ウィリアム・ホガースの風刺画からは、このような形での辛らつな風刺を可能とした18世紀イギリスのジャーナリズムの発達が見て取れる。現代に近い形での自由言論が行なわれていたのである。ドイツの社会学者ハーバーマスは、近代イギリスのこの状況を公共圏の確立と呼んだ。

18世紀末の興味深いイギリスの文化現象として怪奇小説ブームがあった。ホレーズ・ウォルポールらにまじって、女流作家アン・ラドクリフはその代表作『ユドルフォの謎』その他で、ヒロインが背筋の寒くなる恐怖の中、危険を切り抜けてゆく独自の境地を切り開いた。こうした恐怖小説人気の背景にあるのは、人間の恐怖心そのものを関心の対象としてしまう人間心理への探究心である。恋愛の際の感情の動き、自分にとっての大事な人の安否を気遣う気持ち、こうした特別な状況の心理への洞察が、ワーズワースの『抒情民謡集』の多くの作品にも反映している。

さらに18世紀、前述の言語の起源への関心と同時に、古い時代のバラッド、古謡への人気が高まった現象も見逃せない。これに大きく貢献したのは、トマス・パーシー編纂による『英国古謡拾遺集』である。さらにオ

シアンなる詩人がゲール語に記した叙事詩を発見したと主張するジェームズ・マックファーソンの擬似古代叙事詩が人気を博したり、農民詩人のロバート・バーンズの詩歌が広く読まれたりといった状況も『抒情民謡集』の背景として重要である。ワーズワースは、こうした民衆芸術に近い形で彼の詩歌をつくり、それを「現実に使用される言語を詩的形式に適用することでどれだけ詩としての感動をつたえられるか」の実験であると序文で宣言した。民謡の形式を借用しながら、彼自身の詩に対する根本的な企てをもっていたのである。ところでウィリアム・ブレイクも、彼の『無垢と経験の歌』において、ワーズワースと非常に類似した実験をおこなっているが、今回の展示では、ブレイクの挿絵画家の仕事を見ていただきたい。特にロバート・ブレア『墓場』に添えられた彼の挿絵は、一見の価値がある。

ワーズワースは幼少のときより故郷の湖水地方の山々を毎日のように散策することを日課としており、景観を見ることに対するの特別な意識をもっていた。この意識は、ギルピンやバークらによる絵画的景観美についての議論によって磨かれ、彼の観察眼をさらに鋭いものにした。今回特に、ウィリアム・ギルピンの景観美についての代表的著作を紹介できることは幸運である。同時にワーズワースの湖水地方の景観保全についての並々ならぬ熱意をしめす彼の『湖水地方案内』の発展を示す4点は、彼の植生や地質学もふまえて環境を総合的に保全しようという、現代の環境運動に通じる先見の明を示すことを指摘しておきたい。

以上の資料から、18世紀という時代が直接に現代に通じる文化を、すでに持っていたことがお分かりであろう。フランス革命に直接関係する資料はないものの、革命、変革の時代と呼ぶにふさわしい文化状況の展開が展示資料からお分かりいただけるであろう。

文学部准教授 田久保 浩

解題

【I. ワーズワースのサイン入り肖像画】

1. ウィリアム・ワーズワース署名入り版画 【原画 Benjamin Robert Haydon】

当時の著名な画家、ロバート・ヘイドン画の油彩を基にした版画。ワーズワース自らにより、コニストン在住のドクター・バイウォーターに贈呈されたもの。

2. ウィリアム・ワーズワース署名入り版画 【原画 Margaret Gillies】

マーガレット・ギリーズの油彩を基にした版画。ワーズワース自身が署名し、知人に贈呈したもの。“Wm Wordsworth, Rydal Mount, 3 Dec. 1833” とのワーズワースの自筆署名入り。

【II. 抒情民謡集と初期詩集】

3. 『抒情民謡集』 初版 1798

[William Wordsworth and S. T. Coleridge]. *Lyrical ballads: with a few other poems*. London: J. & A. Arch, 1798.

ウィリアム・ワーズワースが友人、サミュエル・テラー・コールリッジとともに、匿名で著わした詩集。現代イギリス詩の幕開けとなる記念碑的な1冊。ブリストルの出版者ジョセフ・コトルの手で約500部が印刷されたものが、ワーズワースとコールリッジが勉学のためドイツに滞在中、ロンドンの出版者 A. アーチに売却され、出版されたもの。

4. ウィリアム・ワーズワース 『抒情民謡集』 2巻 1800

W. Wordsworth. *Lyrical ballads, with other poems: in two volumes*. 2nd ed. London: Printed for T.N. Longman, 1800.

初版が完売したことを見て、大手の出版者ロングマンが第2巻目を加えて、2巻本の詩集として出版することを申し出た。ワーズワースは友人の筆による詩を含むことを序文で書き添えたうえで、彼自身の名によりこの第2版を出版する。この版にはワーズワースによる有名な「序文」がつけられた。その中で彼はこれらの詩により詩のあり方の改革をもたらすべき「理論」を提示する。これにより、ワーズワースは彼の理論により文学の世界に革命を起こそうとしている急進派としてのレッテルを張られてしまうことになる。

5. ウィリアム・ワーズワース 『抒情民謡集、牧歌的その他の詩』 1802

W. Wordsworth. *Lyrical ballads, with Pastoral and other poems*. Two volumes. 3rd ed. London: T.N. Longman, 1802.

誤植の多かった上記展示4の2巻本を改訂したもの。タイトルには「牧歌的詩歌」という言葉が付け加えられた。1800年版と同じ「序文」をつけて出版された。この後、1805年には第4版が出版され、ワーズワースの名は広く知られることとなる。

6. ウィリアム・ワーズワース 『二巻組詩集』 1807

William Wordsworth. *Poems, in two volumes*. London: Longman, Hurst, Rees, and Orme, 1807.

ワーズワースの詩の中でもよく知られた「カッコー」、「水仙」、「虹」、「デイジー」、また、「ティンターン僧院(『抒情民謡集』)」と共に有名な「靈魂不滅の歌」が収められたのもこの詩集である。しかし、フランス革

命後の反革命、保守反動の政治的風潮の中にあつて、ここに収められている「蛭取り人」、そして『抒情民謡集』中の「白痴の少年」、「狂気の母」、「年老いた乞食」などの社会から見捨てられた人々や、道端の草花などの些細な事物に目を留めるワーズワースの姿勢が、ワーズワースの「急進派」詩人としての評判を決定付けることとなり、酷評を受ける。ワーズワースは、こうした世間の理解のなさに嫌気が差して、しばらく詩を発表することを放棄する。

【III. 18世紀の科学・学術の発展】

7. 『ブリタニカ百科事典』 初版 1771 [リプリント 1968]

Encyclopædia Britannica, or, A dictionary of arts and sciences, compiled upon a new plan : in which the different sciences and arts are digested into distinct treatises or systems, and the various technical terms, &c. are explained as they occur in the order of the alphabet. Edinburgh: A. Bell and C. Macfarquhar, 1771. [Reprint 1968]

18世紀にはいくつかの注目すべき百科事典が編纂され、科学技術の進歩、拡大に大きく貢献した。1728年にエフレイム・チェンバースが出した百科事典は好評で大きな需要を掘り起こした。これを見たフランスの啓蒙家デイドロは有名な『百科全書』の出版を、政治的な困難を乗り越えて敢行する。これに刺激を受けたスコットランドのマクファルカーとベルはスコットランドの学術レベルを生かした新たな百科事典を企て、新進の科学者ウィリアム・スメリーを執筆主幹に据える。これがのちに世界で最も権威のある百科事典となった『ブリタニカ百科事典』の始まりである。

8. エラズマス・ダーウィン 『植物園—二部からなる詩』 1791

Erasmus Darwin. *The Botanic garden: a poem, in two parts: part I. containing The economy of vegetation : part II. The loves of the plants; with philosophical notes.*

London: J. Johnson, 1791.

エラズマス・ダーウィン(1731-1802)は後に進化論で大きな社会的議論を招いたチャールズ・ダーウィン(1809-82)の祖父。医師、植物学者、科学者、発明家、および詩人として、フランス革命期に多くの知識人に多大な影響を与えた知的巨人である。『植物園』は、スウェーデンの植物分類学者リンネの理論のもとに、植物が雌雄の交配により、さまざまに種を増やし、反映する様子を称える詩と、植物学と人間社会についての解説を加えてある。多様な植物の図版を多数収録しており、大変高価な書であったにもかかわらず、多くの読者を得た。

9. エラズマス・ダーウィン 『自然の殿堂ないし社会の起源—詩と哲学的注釈』 1803

Erasmus Darwin. *The temple of nature; or, The origin of society: a poem, with philosophical notes.* London: J. Johnson, 1803.

ダーウィンの詩の翌年に発表された、特にその進化論的思想において注目すべき詩。原始の地球において、混沌とした環境の中で原始的生物が発生し、次第に複雑多様な生物に発達してゆくという進化論的な生命観を表している。ワーズワースを含めて、フランス革命後の知識人たちの間では、聖書の創世記中の神による天地創造は、もはや「文学的な喩」にすぎず、ここにダーウィンが提示する神によらない生命の出現という考え方はすでに広まっていたと考えられる。ワーズワースが読んだダーウィンの『動物学』(1794-96)の知識は『抒情民謡集』のなかでも人間の心理理解として生かされている。

10. トマス・アッスル 『書記法の起源と進歩、象形文字と原初文字、現代古代の石版、写本、証書より写した図版入り—印刷の起源と発達についての記述』 1784

Thomas Astle. *The origin and progress of writing, as well hieroglyphic as elementary, illustrated by engravings taken from marbles, manuscripts and charters, ancient and modern: also, some account of the origin and progress of printing.* London: T. Payne, 1784.

18世紀の知的関心の的の一つに言語の起源や原初言語についての関心がある。ヨーロッパ人が世界

各地でさまざまな文化や言語と遭遇する中で、そうした関心は、いっそう深まった。1786年、ウィリアム・ジョーンズは英語やギリシャ語、ラテン語を含めたヨーロッパの諸言語はすべてインドのサンスクリット語と同じ語族に属することを明らかにする。トマス・アッスル(1735-1803)は、最初司法を志すが、やがてイギリス議会の古文書の調査と整理を任されるようになり、同時に珍しい古文書の収集家として知られるようになる。王立学術院の会員にも選ばれ、古文書解析の権威となる。本書は貴重な各種古文書を版画複製の形で採録しつつ書記法の歴史的発達を探るものとなっている。多数の古文書図版が興味深い。

11. ウィリアム・ホガース 『教訓としてのホガース—ホガース全作品、約 80 枚の銅版画を含む、これまで見過ごされてきた美点と道徳的傾向についての解説付き』 1768

William Hogarth. *Hogarth moralized : being a complete edition of Hogarth's works. Containing near fourscore copper-plates, most elegantly engraved. With an explanation, pointing out the many beauties that may have hitherto escaped notice; and a comment on their moral tendency.* London: S. Hooper and Mrs. Hogarth, 1768.

ウィリアム・ホガース(1697-1764)は、18世紀最大の風俗画家。後のジェームズ・ギルレイ(1757-1815)に連なる風刺画のジャンルの開拓者と言える。彼の描いた風刺画を通じて、ヨーロッパでもっとも自由な言論を謳歌していたイギリスの社会を垣間見ることができる。展示の絵においては、選挙対策本部の前で、堂々と有権者に金を払って買収している様子が描かれている。

【IV. 怪奇小説ブーム】

12. アン・ラドクリフ 『ユドルフォの謎、ロマンス—いくつかの詩編を交えて』 4巻 1794

Ann Radcliffe. *The mysteries of Udolpho, a romance : interspersed with some pieces of poetry.* 4 vols. London: G. G. and J. Robinson, 1794.

18世紀末、イギリスでは怪奇小説(ゴシック小説)がブームとなり、ホレーズ・ウォルポール(1717-97)、ウィリアム・ベックフォード(1760-1844)、マシュー・ルイス(1775-1818)らが人気を博した。そのなかでも女性作家アン・ラドクリフ(1764-1823)は、女性ヒロインが血の凍るような恐怖と冒険を経験する独特の作風を築いた。ここに展示する『ユドルフォの謎』は彼女の代表作である。彼女の作品はジェーン・オースティンや『フランケンシュタイン』のメアリー・シェリーにも大きな影響となった。恐怖の心理、恋愛の心理などの異常な状態の心理に対する関心は、ワーズワースの『抒情民謡集』にも共通するものである。

【V. バラッド、詩歌の人気とウィリアムブレイクの挿絵】

13. R.ベントリー 『ベントリーのトマス・グレー6詩選への挿絵』 1753

Designs by Mr. R. Bentley, for six poems Mr. T. Gray. London: R. Dodsley, 1753.

トマス・グレー(1714-70)は、この書にも採録されている『墓畔の哀歌』(Elegy Written in a Country Churchyard)の作者として有名である。この詩は18世紀にもっとも人気のあった詩ともいわれる。この廃墟や墓場のわびしさの風情を味わうという感性は歴史的に18世紀になって初めて見られるもので、前述のゴシック小説や展示17以降にあるピクチャレスクの感性に通じる。

14. ジョセフ・リットスン編 『イギリス歌謡選集』(挿絵ウィリアム・ブレイク他) 1783

Joseph Ritson, ed. *A select collection of English songs.* [with illus. by William Blake and others] London: J. Johnson, 1783.

ジョセフ・リットスン(1752-1803)は、古いバラッドや歌謡の収集家。コールリッジ、ワーズワースに大きな影響を与えた本は、トマス・パーシー(1719-1811)の『英国古謡拾遺集』(Reliques of Ancient Poetry, 1765)である。この出版により、イギリスの伝統的なバラッドや古謡に対する関心が高まり、多くの同様の選集が編纂された。また、ウィリアム・ブレイク(1757-1827)の『無垢と経験の歌』のようにシンプルな形式

の詩歌がはやった。展示の書にはブレイクが銅板の挿絵を制作している。ブレイクがまだ 20 代半ばの初期の作品である。

15. ジョン・ゲイ 『寓話と著者の生涯』(挿絵ウィリアム・ブレイク他) 1793

John Gay. *Fables: with a life of the author.* [with illus. by William Blake and others] London: J. Stockdale, 1793.

ジョン・ゲイ(1685-1732)は、イギリス人の詩人であり、劇作家であるが、彼の『乞食のオペラ』はドイツの現代劇作家ブレヒトの『三文オペラ』の下敷きとなった。彼のこの作品が再版されたときにウィリアム・ブレイクが挿絵を委託されたものである。

16. ロバート・ブレア 『墓場—1 編の詩』(ブレイク原画の 12 葉の挿絵) 1808

Robert Blair. *The grave: a poem.* illus. by 12 etchings executed from original designs [of William Blake]. London: R. H. Cromek, 1808.

ウィリアム・ブレイクの挿絵の中でも最も有名なものが、この書につけられた 12 葉である。ロバート・ブレア(1699-1746)は、スコットランドの詩人。展示 13 のトマス・グレイとともに「墓地詩人」として知られた。しかし、ブレアの名が現代に名をとどめているのは、ウィリアム・ブレイクが挿絵の原画を描いたこの書によるところが大きい。死後半世紀以上たったのちに、編集者クロメックがこの書にブレイクの挿絵をつけて出版する企画をたてた。ブレイクは版画のもととなる原画を描いて、サンプルの銅板も一部制作した。しかしクロメックは、ブレイクの暗い、線の太いトーンが気に入らず、版画は、ルイス・シャヴォネッティに委託する。クロメックはこれに腹を立てたブレイクに配慮して、巻頭にブレイクの肖像画を載せた。

【VI. 旅行記の人気と、景観美、崇高美への関心】

17. 『イギリス本島全国旅行記—各地方別、有益なる所見を交えて、イギリス各地の旅行者に好適』 4 巻 増補第 6 版 1761

A tour thro' the whole island of Great Britain : divided into circuits or journies : interspersed with useful observations: particularly fitted for the perusal of such as desire to travel over the island: in four volumes. 6th ed., with very great additions, improvements, and corrections; which being it down to the year 1761. London: D. Browne, 1761.

18 世紀は国内外の旅行への関心が急速に高まった時代である。地元の特産品や名所だけでなく、景観を楽しむことへの関心が新たに加わった。この書のような、国内国外旅行のための旅行記やガイドブックも数多く書かれるようになった。この書も第 6 版を数えていることから当時の旅行熱の高まりがうかがえる。

18. ウィリアム・ギルピン 『主として絵画的景観に関連した 1772 年の観察記録: 英国各地、特にカンバーランドとウェストモアランドの湖沼山岳地帯について』 2 巻 1786

William Gilpin. *Observations, relative chiefly to picturesque beauty, made in the year 1772, on several parts of England : particularly the mountains, and lakes of Cumberland, and Westmoreland.* London: R. Blamire, 1786.

ワーズワースにも影響を与えたのは、ウィリアム・ギルピン(1724-1800)らの論じた絵画的な景観美(picturesque)に対する考え方である。ギルピンらは、フランス庭園のような秩序だった美ではなく、イギリス的な変化に富んだ自然に美を認め、イギリスの風景美に人々を目覚めさせた。ギルピンの考える絵画的な美しさというのは風景そのものの中にあるのではなく、見る人がその中に発見しないといけないものであった。ワーズワースが自然の些細な事象を想像力によって、全く新しい姿に描くことに通じる。この書はワーズワースの故郷、湖水地方にふれていることから特にワーズワースになじみ深いものであった。ギルピンの旅行記は『抒情民謡集』の中の白眉「ティンターン僧院」の中の風景描写にも生かされている。

19. ウィリアム・ギルピン 『絵画的景観について、絵画的景観の旅、および風景画についての3評論』
第2版 1794

William Gilpin. *Three essays: on picturesque beauty; on picturesque travel; and on sketching landscape: to which is added A poem, on landscape painting.* 2nd ed.

London: R. Blamire, 1794.

展示 18 のギルピンの景観論の中でも最も重要なのが本書である。ここにおいてギルピンが、何が絵画的な景観美の重要な要素となるかを論じた。ギルピンは、牧師、学校長を務めながら、生涯にわたってイギリス各地の旅を続けた。彼の旅の必需品はクロードグラスと呼ばれる鏡であった。楕円形の凹面鏡に風景を映し出して、絵画としての構図を確認するためのものである。多くの旅行者たちはこの鏡を携帯して絶景ポイントめぐりを楽しんだ。

20. ユヴデイル・プライス 『絵画的景観試論—崇高と美との比較において、また景観の向上を目的とする絵画の研究について』 1794

Uvedale Price. *An essay on the picturesque, as compared with the sublime and the beautiful; and, on the use of studying pictures, for the purpose of improving real landscape.*

London: J. Robson, 1794.

ギルピンとともに絵画的な風景美についての中心的な論者となったのが、ユヴデイル・プライス(1747-1829)である。彼らの美的認識に大きな影響を与えたのは、エドモンド・バーク(1729-97)の『崇高と美の概念についての哲学的探究』(1757)である。バークはワーズワースらロマン派の雄大な自然に対する畏敬と感動についての根拠を提供したが、プライスもまた、バークの論を風景美の鑑賞に役立つように体系化することを試みた。荒々しさと多様性、変化とともにある種の秩序のバランスが美を形成するという。プライスはこの理論を庭園の設計等に応用した。

21. 『絵画的景観を探るイギリス湖水地方の旅—カンバーランド、ウェストモアランド、ランカシャーのもっともロマンチックな景観描写、古来と現代の習俗、歴史の記述、フィールディングとウォルトン画の 48 葉のカラー図版入り』 1821

A picturesque tour of the English lakes: containing a description of the most romantic scenery of Cumberland, Westmoreland, and Lancashire: with accounts of antient and modern manners and customs: and elucidations of the history and antiquities of that part of the country: illustrated with forty-eight coloured views drawn by Messrs. T. H. Fielding, and J. Walton. London: R. Ackermann, 1821.

二人の画家フィールディングとウォルトンは、2 年間に湖水地方で過ごし、この地方についての取材を重ねつつこれらの絵を描いた。この書のカラー図版はリトグラフによる版画の上に、手作業によって水彩の彩色を施すという手間のかかったものである。このような図版集が出版されることから湖水地方の景観地としての人気の高まりがわかる。

【VII. ワーズワースの湖水地方の景観保護への情熱】

22. ジョセフ・ウィルキンソン画 ウィリアム・ワーズワースはしがき 『カンバーランド、ウェストモアランド、ランカシャーの特選景観』 1810

Joseph Wilkinson. *Select views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire.*

London: J. Wilkinson by R. Ackermann, 1810.

ワーズワースは自身の名を出さずに、この書の序文として湖水地方についての彼の紹介文を寄せている。ワーズワース自身は、ここに収められたウィルキンソンの湖水地方の風景画を必ずしも気に入っていたわけではない。しかし、産業革命が進行する中、イギリスの田園地方の伝統や風景は次々に壊されていった。彼の愛する湖水地方の景観と、そこで暮らす人々の営みを開発や破壊から守ろうというワーズワースの気持ちは切実であったのである。ここでの彼の解説文は、以下の展示 23~25 の書に受け継がれ

てゆく。

23. ウィリアム・ワーズワース 『ソネット集ダッドン川、ヴォードラクールとジュリア、他詩編、イングランド北部の湖水地方の土地についての解説付』 1820

William Wordsworth. *The River Duddon, a series of sonnets: Vaudracour and Julia: and other poems: to which is annexed, a topographical description of the country of the lakes, in the north of England.* London: Printed for Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1820.

この書にも展示 22 の湖水地方についての「序文」が、ワーズワース自身の文章として掲載されている。ダッドン川は、ワーズワースが湖水地方を流れる溪流の中でも特別に愛する美しい川である。この詩集は、彼と同じ故郷で育った弟のリチャードに奉げられている。この書から伝わるのは、彼の魂を育ててくれた湖水地方の自然を大切に思う気持ちである。自然と何代にもわたり、そこで暮らしその風土と一体となって暮らしている人々の営みを、そのまま守りたいという深い情熱である。

24. ウィリアム・ワーズワース 『イングランド北部、湖水地方案内、景観等の解説、旅行者および住人の用途のための』 1835

William Wordsworth. *A guide through the district of the lakes in the North of England: with a description of the scenery, &c. : for the use of tourists and residents.* 5th ed.

Kendal: Hudson and Nicholson. 1835.

展示 22 に始まった湖水地方の紹介は、1822 年にガイドブックの形で出版された。これが増補され、完全なガイドブックの形に発展させたのが本書。旅行者向けのさまざまな散策ルートや見どころ、この地方の風土や文化、伝統についての解説が含まれている。ワーズワースの旅行者たちに対する見方は複雑なものがあるであろう。静かなこの地方にとっては邪魔者である。しかし、観光地としてこの地を開発から守るという道もあるだろうと考えたのかもしれない。ワーズワースは、この地方の伝統的な石組み作りによらない新しい家が建ったり、本来この地方の植生にない樹木が植えられたりすることで景観が変化することに対して憤りを感じていたのである。

25. 『湖水地方の完全版案内—旅行者のための詳細な案内、ワーズワース氏によるこの地方の景観解説、セジウィック博士による湖水地方の地質学解説』 1842

Hudson and Nicholson, eds. *A complete guide to the lakes: comprising minute directions for the tourist: with Mr. Wordsworth's Description of the scenery of the country, &c. and Three letters upon the geology of the Lake District, by the Rev. Professor Sedgwick.*

London: Longman, 1842.

ワーズワースは、彼のガイドブックに地質学上の解説を書いてもらうよう、ケンブリッジ大学、セジウィック教授に依頼した。そしてワーズワースの『ガイド』は最終的な形を見る。ワーズワース以外にもジョナサン・オトリーらのガイドブックも出版され、ワーズワースの『ガイド』が版を重ねてゆくことから、湖水地方への観光客の増加がわかる。ワーズワースの湖水地方の自然を守ろうとする意志は、イギリスのナショナルトラスト運動へと引き継がれてゆく。『ピーター・ラビット』の作者ビアトリクス・ポターもワーズワースと同じく、この湖水地方の自然と伝統に魅せられ、これをそのまま守りたいと願った一人であった。彼女も自分で開発から守るために購入した土地をナショナル・トラストに寄付して、その自然を守ってゆくように託した。



2010年10月19日

発行：鶴見大学図書館